

## 下市のお獅子の源はターキー（トルコ）に在った

— 民俗から歴史を解く —

二 宮 哲 雄

はじめに

大分県由布市挾間町の下市自治区で、三年ほど前から、伝統の荒神祭が復活したが、そこでは以前の通り、荒神様と共に、お獅子の活躍が目立った。

それは日本全国各地に伝わる「獅子舞」の範疇に含まれる行事の一つであるに違いない。

その「お獅子」、「獅子舞」の歴史の源が、中近東のターキー（トルコ）に在ったことを明らかにしたい。同時にこれらの民俗から日本の歴史の切り口の一つを窺いたい。これが本稿の目的である。

さて日本の近代化は、明治維新（一八六七—）に始まり、特に第二次世界大戦後（一九四五—）に急速に進んだ。その過程で、とりわけ昭和三十五年（一九六〇）頃から始まった高度経済成長と、それに伴う近代化の過程には、誠に目を見張るものがあった。

ところが、わが国においては、実にこのような華やかな近代化の進展に対し、まるでそれに付き随う影であるかのように、多くの、伝統を持つ歴史的な文化が壊され、ついには消滅してしまったものも多かったのであった。

それは歴史研究の立場から見ると、わが国において発達しつつあった近代的、科学的な実証研究に耐え得る歴史の史料や資料が、次々に消滅していく憂き目に遭ったということになる。そこでは伝統のある建造物が壊され、何と貴重な古文書さえもが、焼却、消失させられていったものがあった。

このような歴史研究分野の実情と表裏するかのようには、にわかに研究者達の注目を浴びるようになったのが、民俗資料の分析であった。それと同時に民俗 (Folk customs, folk ways) と民俗学 (Folklore) への関心が高まっていった。

民俗の中でも、とりわけ口承伝承 (oral tradition) が注目されるようになったのは、当然の成り行きであったといえるだろう。つまり古いものを伝える手段は、実際には口頭による言い伝え、口承による伝承が最も為され易く、資料としても収集の可能性が高いということになったのだ。

この点世界の中で最も近代化が進んだ国の一つと見なされているアメリカ合衆国では、事情は極めて明白であった。

そこでは各種の歴史資料をはじめ、何と主たる民俗慣行までもが絶無といわれる状態に近くなった。そのため研究者達の眼は次第に、唯一残った口承伝承に注がれるようになったのである。

このような傾向の中で、いまやアメリカでは「Folklore (民俗学) の代名詞は、Folk tale (昔話)」であるというような考え方を生み、それが常識化されつつある。

本稿は、以上のような歴史的、社会的背景をもってまとめられる。

本稿では、日本の歴史上の源（ルーツ）の一つを探る目的を以つて、アジアの中の日本と、中近東のターキー（トルコ）を取り上げ、それらの民俗慣行と、口承文芸（昔話）について分析を行うことにする。

なおその理解に資するため、アフリカ（南アフリカ）の資料も添えたい。

### 一、獅子舞Ⅱライオン・ダンス

一九六三年六月十八日から、アメリカ合衆国インディアナ州立インディアナ大学の大学院のサマーセッション（夏学期）で、カリフォルニア大学から集中講義にいらっしやったW・エバーハード（W.Eberhard）教授の“Turkish Folklore”（「ターキーの民俗学」）の講義が始まった。

当時同大学院の博士課程後期課程の学生として在籍していた私は、それを受講することになった。

その際、アメリカの大学院の慣習であるが、私は教授からペーパーのアサインメント（assignment, 宿題）を頂いた。

教授からアポイントメントを取った日、教授の部屋を訪れ、私が椅子に座るや否や、エバーハード教授は、

「ミスター・ニノミヤ、君、日本のライオン・ダンス（Lion Dance）のことを書きませんか」

とおっしゃった。

「Lion Dance… ああ『獅子舞』のことか」と私は察した。それ

にしても何故？

エバーハード教授はその私の疑問を解くように「日本の獅子舞はねえ、ターキーのライオン・ダンスがそのルーツ（源）なんですよ」と説明して下さいました。

なるほど、ライオン（獅子）が棲んでいない日本で獅子舞が盛んなのは、不思議と言えば不思議なことなのだが、そういう訳だったのか。私は納得した。それにしてもえらいことを教わったものだ。

獅子頭をかむって踊る日本の獅子舞は、余りにも有名である。それは日本の代表的な民俗芸能の一つであると言えよう。東北地方をはじめ、関東から近畿以西、九州地方にまで広がっている。

実はそれほど完成した、盛大なものではない。とくにその中で派手な舞の部分は省略されているのだが、下市でも、「荒神祭」の中で「お獅子」や「獅子頭」が登場するのだ。次のような具合である。

「ドンドン、トントコトンと囃子（はやし）を従えて、露払いを、先



〈写真2〉  
荒神祭の子供みこし



〈写真1〉  
荒神祭の山車と太鼓・練りの人達

頭に、おひい、お獅子、荒神、山車、そして子供みこしと続き、一〇〇人以上が地区を練り歩いた」(園田俣子)<sup>(註1)</sup> 〈写真1〉〈写真2〉  
「お面をかぶった赤装束の荒神はシバを片手に持ち、地面をたたき、田畑が荒廃しないよう祈願しながら、獅子、世話役とともに30戸を回った」(同右)<sup>(註2)</sup> 〈写真3〉。

この園田俣子氏の紹介文の外に、平成二十年度の荒神祭の会長を務めた自治委員の二宮明久氏の解説もある。<sup>(註3)</sup> それによると、「荒神」は「素

笈鳴尊(すさのおのみこと)」で、その「治山治水」の「偉業を称え、感謝をする舞」が、祭りでも舞われた「神楽」の舞いであるという。それから「頭が八つ尾が八つのおろち」



〈写真3〉  
荒神様と練りの人達

は、川の上流と支流を表し、その「川が洪水で稲田(姫)を飲んでいたのを治めた」のが、「おろち退治」であるという。祭りで荒神様が、柴を持って、叩き回り暴れ回るのも無理はない。

さて肝心の、本稿の主題であるお獅子は何をしているのか。お獅子は、園田氏の紹介文の中にあるように、祭りの練りの列の中にある。唯お獅子の場合、度々列を離れて行動するのが特徴である。その点は荒神様も同じだが、特にお獅子の頭と胴体を表す布を冠った二人は、絶えず列を離れ、そして一軒々々の家を回った。そのお獅子の口がぱくぱくと開閉するのを拝みながら家人は、無病息災、家

内安全、豊作を祈った。

このお獅子に頭をかんでもらうと、来年福が来るという言い伝えがあつて、私もそれをやってもらった〈写真4〉。

この、下市の荒神祭でも、荒神様と並んで「お獅子」が主役の中に入ることが間違いない。

この下市のお獅子が、日本の全国各地で行なわれる、獅子舞のカテゴリーに含まれることは明らかであるう。

さて、そのお獅子―獅子舞の歴史のルーツ(源)が、中近東のターキー(トルコ)に在るとするのが本稿の要点である。

全くとんでもない、飛躍的な発想を持ち出したものだといぶかる向きもあるかも知れないが、次のような事実を明らかにすれば、納得してもらえらるだろう。

「桃太郎(ももたろう)」の昔話は、日本中誰一人知らぬ者はいないと言つても過言ではなからう。日本で最も有名な昔話の一つである。

その「桃太郎の昔話」が生まれたのはユーラシア大陸であるという説は、<sup>(註4)</sup> わが国では既に定説化されていると言えよう。

それだけではない。「一寸法師」、「かぐや姫」、「瓜子姫」あるいは「座敷ワラシ」など、日本の有名な「小公子」物語の源が、同じ



〈写真4〉  
獅子頭に頭をかんでもらう

くユーラシア大陸に在ると云う。<sup>(註5)</sup>

本稿で対象の地になっている「ターキー(トルコ)」も、このユーラシア大陸に属している。

以上のような事実を追っていけば、われわれは自然に、『日本文化の源』つまり『日本の歴史の源』の一つがここにある、という考え方に向かわざるを得なくなるだろう。

現在は三七〇戸を越えるほどになったが、五、六十年前は六十余戸しか無かった。そういう九州、大分県の一集落である、下市自治区の文化と歴史の源の一つが、遠く中近東、ユーラシア大陸に求められるということは、やはり一つの驚くべき発見であるに違いないだろう。

これがわが「挟間町の歴史」、「由布市の歴史」、延いては「大分県の歴史」、さらには「日本国の歴史」を問い直すよすが(縁)ともなれば幸いである。

## 二、昔話IIフォーク・テイル

ターキー(トルコ)と日本では、昔話(Folktales)のモチーフ(Motif)が良く似ている。私の考えでは、そのような事例に限って云えば、タイプ(Type)も似ているように思えるのだ。「モチーフ」というのは今更言うまでもなく、昔話に登場する人物の行為の記録と考えてよいし、「タイプ」は昔話じたいの話型のことである。

さてここに昔話に関する二冊の著書がある。

その一つは

Margery Kent, *Fairy Tales from Turkey*, 1916,

であり、他は

Keigo Seki ed. : *Folktales of Japan*, 1963,

である。

この内、前者のケント氏(M. Kent)の著作に載っている全部で二十三の昔話について私は調べた。

その結果、後者の、日本の昔話と厳密に同じタイプの昔話であると言言出来るものは見つからなかったのだが、モチーフに関しては、明らかに同じか、類似のものであると思われるものは、かなり見つかった。ところで不思議なことにそういうモチーフの似ている昔話についてだけ、もう一度良く良くタイプを厳密に吟味してみると、そういう昔話についてはどうやらタイプも類似していると解釈してよいのではなからうか、という気持ちが出てきた。不思議であった。これらのモチーフを持つ昔話の作者は、結局は念頭に同じタイプの昔話を置いていたのではないか。私の読み込みが過ぎるか。それらは次のようである。

A. 超自然出産児が強くなって悪魔(鬼)を退治する話。

ターキー：ハマー、粉ペビー、

日本：桃太郎、桃少年。

B. 娘の助言によって結婚出来た話。

ターキー：古い鍵、

日本：娘の助言。

C. 人間と動物の結婚話、異類婚姻譚。

ターキー…恋に落ちた馬、

日本…蛇女房、蛇婿入り、蛇息子。

D. 謎解き婿。

ターキー…金の山羊、

日本…謎解き婿。

E. 人間の小指程もない子供の誕生。

ターキー…小指より大きくない小人の誕生、

日本…一寸法師。

F. 助言に従って幸運を得る兄弟と、従わずに不運を蒙る兄弟の話。

ターキー…金の山の王様の話、

日本…なら梨採り。

G. 動物を助けてプレゼントを貰う話。

ターキー…籠作りの話、

日本…浦島太郎。

H. まま母（継母）がまま子（継子）を虐待し、まま子が結局

よいものを受け取る話。

ターキー…クリスタル（水晶）、

日本…米福栗福。

以上である。

むろん昔話についての、両国の他の著作や資料を参照すれば、他にも多くの事例が見つかるのではなからうか。

それはともあれ、ここで私が言いたいのは、アジアの中の日本と、

中近東のターキー（トルコ）の間に、少なからぬ、文化の面での共通性が見つけ出される、ということである。

実は今は詳細に語るいとまは無いのだが、中近東から海を越えたアフリカ（Africa）、特に私が分析した南アフリカ（South Africa）には、右で述べたような昔話の類似性は、殆んど無い、ということである。

なお、ここで南アフリカについて、私が参照したのは、

Geo. MacCall, *Kaffier Folklore*, 1880.

である。

おわりに

地理Ⅱ地勢上の問題なのか、あるいは地政学に関わる要因によつてなのか、今は明らかに断ずることは出来ないが、どうやら日本はアフリカ（南アフリカ）よりも、中近東の方が、社会的、歴史的に近いということが言えそうである。

いずれにしろ、本稿で、日本とターキー（トルコ）の間に、文化面でのつながりがあることが明らかになった。

実は私のこうした論述のキー・コンセプトになったのは「民俗」であった。もつと云えば「民俗」と「歴史」が本稿の基礎概念であったのである。

このことは、今後われわれが、挟間町や由布市、さらには大分県や日本国の歴史研究を進めるにあたって、銘記しておくべき事柄であらう。

(註)

(1) 園田俣子「伝統『荒神様』練り歩く」『大分合同新聞』平成二十年一月七日。

(2) 同右。

(3) 二宮明久「『荒神』を体験して」『公民館便り』平成二十一年元旦。

挟間町教育委員会編『挟間町の文化財「挟間地区の文化財」』第五集、五二―五三頁。

本稿に掲載した写真には、平成二十一年度の荒神祭のものも入っている。

(4) 石田英一郎『桃太郎の母』講談社、一九六六年。

(5) 同右。

〈参考文献〉

Margery Kent, *Fairy Tales from Turkey*, 1916, Routled & Kegan-paul Ltd., London.

Keigo Seki ed. & Robert J. Adams Tr.: *Folktales of Japan*, 1963, The University of Chicago Press, Chicago.

Geo MacCall, *Kaffier Folk-lore*, 1880, Swan Sonnenschein, Le Bas & Lowrey, London.

Tetsuo Ninomiya, *Asian Characteristics reflected in Folktales in Turkey*, ST. ANDREW'S UNIVERSITY'S SOCIOLOGICAL REVIEW, Vol.3 No.1/2, 1970.

附記

本稿を作成するにあたっては、挟間史談会の会員でもある、妻光子の協力を得た。感謝する。